

今から始まる私自身の「反戦・平和の旅」

福岡県 飯塚やまびこ会『今が青春』主宰 ■ 渡部 英隆



アウシュヴィツ強制収容所跡入口 「働けば自由になれる」という表示がある。ここで400万人が犠牲になった

1998年3月、高校生を含め、僧侶、現職教師、退職教師ら7人で、ポーランド、ハンガリー、ルーマニアに10日間の旅に出掛けた。

この旅での私の大きな目的はアウシュヴィツ等の強制収容所を直接見ることだった。

トレプリンカは、ポーランドの首都ワルシャワから80km離れた寒村にあった。林の雪道を歩くと突然林が途切れて石碑が現われた。そして石で作られた線路跡が森の奥へと続いていた。あのコルチャック先生と200人の孤児たちが運ばれてきた線路だ。ここで80万人が殺されたと言われる。線路の両脇には物言わぬ墓標がわりの自然石が延々と続いていた。彼は「子どもの権利条約」の下書きを作ったことでも知られ、友人の援助で国外に逃亡することも出来たが、200人の孤児を助けることができないと知ったとき、愛する子ども達と共に「死の行進」の先頭に立ったのだった。

雪原や無言で語る石碑群

次の日、ワルシャワの南方300kmの都市クラコウのさらに西50kmのオシフィエンチムに行く。ドイツ名「アウシュヴィツ」である。第二次世界大戦中の5年間、ユダヤ人、ロマ（ジプシー）、共産主義者、反ナチス活動家、リベラリスト等が捕らえられ、この強制収容所に送られてきた。女、子どもなど、あるものはすぐに殺され、あるものは酷い労働のあと殺された。ここで400万人が殺されたという。

収容所正門に「ARBEIT MACHT FREI」（働けば自由になれる）という空々しいプレートが残されている。この文字のうちBの字は上下逆さまに上が膨らんでいる。作業の囚人がせめてもの抵抗でやったのだ。囚人たちは最初の日、管理局長から告げられた。「お前等には出口は一つしか

い。焼却炉の煙突だ」と。

残雪やアウシュヴィツの門に立つ

ガス室に送られた人々は、ここでシャワーを浴びるのだと説明され、脱衣室で服を脱ぎ地下室まで歩かされ、「浴室」に閉じ込められてチクロンBという猛毒を投入されて窒息死した。死体から金歯が抜かれ、髪の毛が刈られ、指輪、ピアスが抜き取られた。そして死体は一階の焼却炉で焼かれた。

展示室にはおびただしい数の、ドクロのマークが印刷されたチクロンBの空き缶、刈り取られた髪の毛、めがね、義手義足、食器、トランク、靴、ブラシ、洋服などがそれぞれ一部屋ごとに置かれていた。そうした中で小さな洋服、小さな靴、人形そっくりした品々は涙なしには見られないものだった。

いくつかの展示場の中庭に「死の壁」と言われる空き地がある。数千人の囚人が銃殺された場所だ。沢山の修学旅行生が来ていて、平和のメッセージを読み上げたり花束を供えていた。私たちも供えられたローソクのゆらめきを見ながら手を合わせた。

残雪や祈るのみなり死の壁に



トレプリンカ強制収容所跡 コルチャック先生と200人の孤児たちが殺された収容所。ここで80万人が殺された



「絶滅」展示室 義手・義足、めがね、髪の毛、トランク、靴、ブラシ、衣類、猛毒のチクロンBの空き缶など、部屋ごとに山積みされていた



ビルケナウ強制収容所跡 アウシュヴィツが手狭になって作られた2号絶滅収容所。線路の行先は死であった

続いて3kmほど離れたビルケナウ収容所に行く。アウシュヴィツだけでは処理仕切れなくなって急造した2号収容所である。正門にはレンガ造りの「死の門」と言われる監視所があり、その下を通過して囚人たちを運んだ鉄道が延びている。行先はガス室、焼却炉である。寒風の吹き抜ける中で飽和状態になる頭を必死でこらえながら見学した。くしくもその日彼岸の中日だった。

幾百万の犠牲に祈る中日かな

ルーマニアに入って、シゲットのユダヤ人墓地に行った。縦120cm、横180cm、高さ100cm位の石碑があった。案内者みやこうせい氏が言った。「実はアウシュヴィツで死んだユダヤ人の墓はないのです。これが何万人分かの墓なんです」と。幸いにも死を免れて帰ってきた人たちは、それぞれに石鹸を持って帰った。それはアウシュヴィツで犠牲になった人たちの人体で作られた石鹸だった。ナチスはこれを使えと渡したが使える訳がない。ここに持ち寄って作った石鹸のお墓だった。

「東のアウシュヴィツ、西のヒロシマ」と言われ、一度は現地に立ちたいと思いつけて30年が過ぎてしまった。生徒への「平和教育」をしながらも、心の奥に宿題として残されていた課題が、今度の東欧の旅でやっと解けた思いだ。同じように退職後になって、「沖縄」そして中国の「盧溝橋」「重慶」「南京」など、現職のときに訪れたかった場所にも行くことが出来た。「新ガイドライン」など許されぬ動きが公然と押し寄せる今日、私自身の「反戦平和の旅」はやっと今から始まる思いである。

石鹸の墓に停む彼岸過ぎ



「死の壁」と呼ばれる死刑執行所跡 沢山の修学旅行生も来て、平和メッセージを読み、花束をたむけていた。私たちもここで祈った



ユダヤ人墓地の「石鹸の墓」 アウシュヴィツで殺されたユダヤ人の墓はない。死を免れて帰って来た人々が、犠牲者の人体で作られた石鹸を持ち寄って墓とした